第6講座 古文

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

冬も来ぬれば、けさよりなるるうづみ火のもと、やうやう立ちはなれがたし。露と霜とおきかはし、もみぢいろこく、木々のこずゑ、*1浅茅が原も、冬がれのけしきとなり、おもがはりするも、①秋にことなるながめなり。神無月の時雨もすぎて、日あたたかなれば、すこし春ある心地す。うべ②此の月を③小春とぞいへる。

（貝原益軒『益軒十訓』）

＊1浅茅が原＝たけの低いちがや（草の名）の生えている野原。

〔現代語訳〕

冬も近づいたので、今朝から火を入れた火鉢のそばも、だんだんと離れにくくなる。露と霜とがおきかわり、もみじの色が濃くなって、木々のこずえや、浅茅が原も、冬枯れの景色となり、様子が変わっていくのも、秋とは違ったながめである。十月の時雨のころも過ぎてしまうと、日ざしも暖かいので、少し春めいた感じがする。この月を小春と呼ぶのももっともである。

問一 〰線a「おきかはし」、b「いへる」を現代かなづかいに直して書きなさい。

a（　　）　b（　　）

問二 ═線部「だんだんと」にあたる古語を古文中から書き抜きなさい。

（　　）

問三 ―線①「秋にことなるながめなり」とありますが、冬の「ながめ」として適当ではないものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア もみじの色が濃くなること。
イ 霜がおりること。
ウ 冬枯れの景色になること。
エ 露がつくこと。

（　　）

問四 ―線②「此の月」とは何月ですか。

（　　）

問五 ―線③「小春」とありますが、筆者はどんな理由から「小春」という名がもっともだと思ったのですか。

（　　）

問六 この文章で描かれている時期として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 初春
イ 仲秋
ウ 初冬
エ 晩冬

（　　）

2 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

ある犬、肉をくはえて川を渡る。まん中のほどにて、その影水に映りて、大きに見えければ、「わがくはふるところの肉より大きなる」と心得て、①これを捨ててかれを②取らんとす。かかるゆゑに、二つながらこれを失ふ。そのごとく、重欲心の輩は、他の財をうらやみ、事にふれて貪るほどに、たちまち天罰をかうむる。わが持つところの財をも失ふことありけり。

（『伊曾保物語』）

〔現代語訳〕

ある犬が、肉をくわえて川を渡る。まん中あたりの所で、その影が（川の）水に映って、（肉が）大きく見えたので、「私がくわえている肉より大きい」と思って、これを捨てて（影になって映っている）肉を取ろうとした。このために、二つとも失った。そのように、欲の深い者どもは、他の人の財産をうらやましく思い、何かの機会につけて欲ばるので、たちまち天罰をこうむる。自分の持っている財産をも失うことがあるものだ。

問一 ――線①「これ」の指しているものを古文中から書き抜きなさい。

（　　）

問二 ――線②「取らんとす」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「取らんとす」の動作主を古文中から書き抜きなさい。

（　　）

(2) 「取らんとす」という行動を起こしたのは、なぜですか。

（　　）

問三 この文章を事例と教訓の二つに分けるとすると、教訓を述べているのはどこからですか。その初めの五字を古文中から書き抜きなさい。

（　　）

問四 この文章で作者が述べようとしていることとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 他人の持っているものは、何でもよく見えるということ。

イ 二つの欲望は、同時にはかなえられないものだということ。

ウ 欲ばりすぎると、かえって思わぬ損をするものだということ。

エ 油断すると、同じ失敗をくり返すものだということ。

（　　）

品詞分類

(1) 次の――線部の品詞名をあとから選び、記号で答えなさい。

・①雨が②いきなり降り出した。③でも、だれも傘を持っていなかった。

・④「こんにちは。⑤その犬、⑥かわいいね。」と、友達が私に言った。

・⑦にぎやかな声が隣の教室から⑧聞こえる。

ア 名詞　**イ** 副詞　**ウ** 連体詞　**エ** 接続詞

オ 感動詞　**カ** 動詞　**キ** 形容詞　**ク** 形容動詞

①（　　）②（　　）③（　　）④（　　）

⑤（　　）⑥（　　）⑦（　　）⑧（　　）

(2) 次の――線部の単語を助詞と助動詞に分類し、番号で答えなさい。

この本は①、とてもおもしろいらしい②。僕も③早く読みたいなあ④。

助詞（　　）助動詞（　　）

練習問題

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにしてものにさとかれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあはは、おつむてんてん、かぶりかぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、①とみにとらせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつつ、それもただちに倦て、障子のうす紙をめりめりむしるに、「よくしたよくした。」とほむれば、誠と思ひ、きやらきやらと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、②なかなか心の皺を伸ばしぬ。

又、人の来りて、「わんわんはどこに。」といへば、犬に指し、「かあかあは。」と問へば、③烏に④ゆびさすさま、口もとより爪先迄、愛嬌こぼれてあいらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るるよりもやさしくなん覚え侍る。

（小林一茶『おらが春』）

〔現代語訳〕

去年の夏、竹を植えるのによいという日（陰暦の五月十三日）の頃、つらいことの多いこの世に生まれた娘に、（生まれつきは）愚かであっても利口に育ってほしいと思って、⑤名をさととつけた。今年の誕生日を祝う頃から、「ちょうちちょうち、あわわ」「おつむてんてん」（という遊びも覚え）、「かぶりかぶり」と頭を振りながら、同じ年頃の子供が風車というものを持っているのを見ると、しきりにほしがってむずかるので、すぐに与えると、問もなくむしゃむしゃとしゃぶって捨て、少しの執着心もなく、すぐにほかの物に心移りして、そこらにある茶碗を打ちこわしているかと思うと、それもすぐに飽きてしまい、障子の薄紙をめりめりとむしるので、「よくやった、よくやった」とほめてやると、本当にほめられたと思い、「きゃっきゃっ」と笑って、一生懸命にむしってしまった。心の中には少しの塵もなく、まるで名月がきらきらと光り輝くように清らかに見えるので、並ぶもののない名優の演技でも見ているようで、大いに心の皺を伸ばした。

また、人が来て、「わんわんはどこに」というと、犬を指さし、「かあかあは」と問うと、烏を指さすさまは、口もとから爪先まで愛敬があふれて愛らしく、たとえていえば、春の若草に蝶々が戯れているのよりも優美に思われることである。

問一 ――線①「とみにとらせけるを」にあたる現代語訳を書き抜きなさい。

（　　）

問二 ――線②「なかなか心の皺を伸ばしぬ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「心の皺を伸ば（す）」とは、どのようなことをたとえた表現ですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 気持ちがゆったりとして晴れやかになったこと。

イ 積み重なっていた誤解がとけたこと。

ウ 思わず見とれて心がひきつけられたこと。

エ お互いの心と心とが通じ合ったこと。

（　　）

(2) (1)のような状態になった原因が述べられている部分を古文中から探し、その初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

〜

問三 ――線③「問へば」、④「ゆびさす」の動作主を次のうちから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 迹なき俳優　**イ** さと

ウ おなじ子ども　**エ** 人

③（　　）

④（　　）

問四 ――線⑤「名をさととつけた」とありますが、一茶はどのような思いを込めて「さと」という名前をつけたのですか。古文中から十三字で書き抜きなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多く積もりたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。

何事も、ささし向かひたるほどの情ばかりにてこそはべるに、これは、ただ昔ながら*1つゆ変はることなきも、いとめでたきことなり。

（『無名草子』）

＊1つゆ＝少しも。

問一 ――線①「その折」の内容を説明したものとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 親しい人からその手紙をもらったとき。

イ 昔親しくしていた人からの手紙を見つけたとき。

ウ 昔の友人に手紙を探してもらったとき。

エ 昔の古い手紙をなくしたとき。

（　　）

問二 ――線②「返す返すめでたけれ」とありますが、どのようなことがまったくすばらしいというのですか。

（　　）

問三 この文章に述べられている筆者の考えとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 直接話すよりも自分の気持ちを素直に表現することができ、手紙を交わした相手とは変わらない友情で結ばれるのが、手紙のよさである。

イ 時間や空間を越えて人々と交流でき、会ったことのない昔の人や異国の人でも、読めばすぐに心を通わせられるのが、手紙のよさである。

ウ いくら時間が経過してもつづられた言葉は変わらないで残り、読めばすぐに当時のことがあざやかによみがえるのが、手紙のよさである。

エ 自分の気持ちが落ち着かないときに書いてしまったとしても、時間をおいて文面を何度も書き直すことができるのが、手紙のよさである。

（　　）